

第32回 SSOR ルポ



渡辺(広島大学), 土肥(広島大学), 小柳(鳥取大学), 得能(鳥取大学)

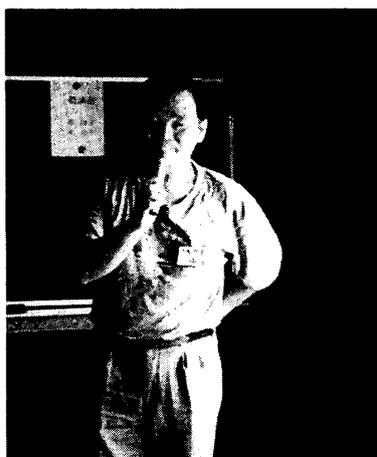
OR 研究および実務に携わる若手研究者や実務家のための夏季セミナーとして昭和39年に SSOR が発足して以来、今年で32回目を数えることになりました。本年度平成9年は8月18日(月)~21日(木)の4日間、海生直人(広島修道大学)主査の下で広島県呉市警固屋にある「国民宿舎音戸ロッジ」において開催されました。当地「音戸」は「音戸の瀬戸」に形容されるよう、瀬戸内海の風光明媚を凝縮したような町であり、近くには音戸大橋、平清盛ゆかりの「清盛塚」および「高鳥台」、民謡で有名な「音戸の船歌」の碑などがあります。また、旧海軍関係の貴重な資料が展示されている「入船山記念館」および「海事博物館」や江田島第一術科学校(旧海軍兵学校)などにも近く、交通の便を除けば SSOR を開催するのに適したロケーションであったように思います。

まず最初に、今回の SSOR を準備する際に最も危惧していたことは、参加者数の十分な確保についてでした。論文発表申込締切日1週間前に申込が5件という事実で愕然とした実行委員会は、とにかくあらゆる手段で参加者確保の人海戦術に乗りだしました。結果として、多くの方のご協力をいただきまして一般講演42件、特別講演3件、のべ92名の参加者を得ることができ、一応安堵した次第です。そういえば、8月のこの時期は大学院入試が行われるところも多く、加えて数理計画関連の国際会議が同時期に開催されたりした

こともあり、いつも団体旅行の様相を呈している常連校からの参加が少なかったのが特徴的でした。また、平成7年に春季研究発表会が広島であったばかりで、しかも平成9年9月に第9回 RAMP シンポジウムが東広島で開催されるという非常にタイムリーな時期でしたので、目測を誤ったというのが正直な感想です。

初日は、主査による開会の挨拶および実行委員による会場説明の後、2つのセッションで計9件の一般講演がありました。いずれも数理計画法に関連した内容でしたが、スケジューリングや生産計画などの話題が特に多かったように思われます。さすがに初日ということもあり、100名以上収容可能な会議室がほぼ満席になる盛況ぶりでした。講演会場からの瀬戸内の眺めの良さに安らぎとすがすがしさを感じ、つつい睡魔に襲われた方も少なくないようでしたが、活発な質疑応答も随所でなされていたようでした。一般講演終了後、片岡靖詞氏(防衛大)による特別講演「線形計画法を図解してみよう」がありました。氏独自の視点から線形計画法の捉え方についてわかり易い説明があり、ルポ担当者も「数式は図にして、図は数式にして、中学生でも解るように説明せよ」に共感を覚えました。防衛大での授業でも好評であるとのことなので、ぜひとも教科書にまとめて広く公表していただきたいというのが個人的な感想です。

夕食後は恒例の談話会が始まりました。「SSOR では燃料をきらすな!」という主査の号令の下、高純度のアルコール燃料が大量に用意されましたが、最近のソフト化傾向を反映してか、主に度数5パーセント未満のものが好まれるようでした(次年度以降の参考にしてください)。SSOR の良き伝統として、一堂に会した OR のさまざまな分野の研究者や学生が専門領域、世代の壁を越えて自由に意見交換できるという謳い文句がありますが、今回に限ってはその目標を完全に達成することができませんでした。というのも、談話会会場を親切にも2部屋用意したため、学生は学生同士、中間世代以上の大学教官はこちらという構図がいつのまにかできあがり、しまいには片方の部屋を「オジン



海生主査

部屋」などと呼ぶ輩も続出したようです。しかしながら、同世代の学生や教官と交流をもてたということは参加者全員の共通した認識であり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

2日目は午前9時から午後5時まで、4セッション16件の一般講演がありました。この日は主に確率モデルに関する講演が多く、内容も最適停止問題、信頼性理論、マーケティング、ゲーム理論、統計、マルコフ決定過程、待ち行列理論、性能評価、探索理論とかなり盛りだくさんなものになりました。ここでは特に、ルポ担当者の印象に残ったものを紹介させていただきます。村原朱美氏（流通科学大大学院）の発表では、「小売業における新製品の最適監視政策」と題して、マーケティング分野における身近な意思決定問題である陳列スペースを考慮した耐久消費財の最適監視時期を求める問題について報告がありました。実際の市場で採集されたデータを用いて提案されたモデルの検証を行う等、実学としてのOR研究の模範的なアプローチであったように思えます。北条仁志氏（大阪府立大大学院）の発表では、「一様な需要分布における競合在庫モデル」と題して、古典的な在庫管理問題をゲーム論的に解釈する試みがなされていました。また、OR学会において待ち行列研究の指導的立場におられる町原文明氏（東京電機大）から、「マルチメディアトラヒック理論の最新動向」と題して、トラヒック特性が長時間依存性や自己相似性を持つようなマルチメディアネットワークを解析するための数学的手法に関連した最新のトピックスについて紹介がありました。非常に難しいテーマではあるものの、トラヒック発生過程のモデル化から網設計に至るまで幅広く内容の濃いサーベイがなされました。

一般講演終了後、木村俊一氏（北海道大）による特別講演「Diffusion Models for Queues in Computer/Communication Systems」がありました。まず、Diffusion approximationにはheavy trafficの不安定な待ち行列に使用されるdiffusion limitsを扱うものと、安定な待ち行列の連続近似に用いられるdiffusion modelsの2種類があることを説明され、diffusion modelsにおける2つのモデル（C（continuously parametrized）、PC（piecewise-continuously parametrized）モデル）についての解説がありました。近似式を作成する上で必要なパラメータ、写像、境界などの作成方法、注意点をわかりやすく説明され、最後にこれからの研究対象の一つとして補間

式の改良をあげられました。予稿の文献リストはとても充実していました。この分野のスペシャリストとして長期にわたり君臨してこられた同氏による業績をかいま見るとともに、今後の研究動向についての指針を与えていただく絶好の機会を得たことは、若手の研究者や学生にとって大変有益であったように感じました。

3日目も予定通り午前9時から午後5時すぎまで、4セッション14件の一般講演がありました。内容は、ネットワーク、交通問題、環境問題、信頼性、資源配分などに関するもので、いずれも興味深い発表でした。この頃になると会議室にも空席がちらほら見受けられるようになり、観光に出かける人数が増えてきました。観光地ではあるが交通の便が悪いという、SSORに最も適した場所(?)を選定したにもかかわらず脱出組が続出したことは、ひとえに実行委員の不徳の致すところではありますが、わざわざ広島市内や宮島にまで足をのばしていたところを見ると、学会参加の効用には予め観光という因子が含まれていることがうかがえます。今回は予想外の盛況ぶりでしたので、SSOR恒例のレクリエーションなるものを企画することができなかったこともあり、かような積極的行動を誘発したものと事後的に解釈しているところです。

この日の特別講演は貝川健一氏（中国電力）に「原子力の話」と題して講演をお願いしました。原子力発電のプロセス、現状、将来の展望等、素人にもわかりやすい説明があり、シンポジウムというよりもむしろ座談会といった雰囲気です。参加者一堂楽しく勉強する機会に恵まれました。質問も、電力料金の地域格差といった日常的なものから原子力発電の国際事情まで幅広いものだったように思います。夜には懇親会が開催されました。毎日が懇親会のようなものなので、特に話がはずむというものでもなかったようですが、大広間での宴席はSSORでの思い出に残る1ページとなったように思います。乾杯、参加者の自己紹介の後、中締となり、談話会会場に移って延々と宴は続いたようです。

4日目、SSORも最終日を迎え、参加者は連日開催される談話会という名の激しい飲み会で肝臓を酷使し、精力を使い果たしているにもかかわらず、最終セッション3件の一般講演には予想以上の聴講者数がありました。しかし、質疑応答となると、夜の談話会のようにはいかず、この4日間の疲労の色はかくせなかったようです。先にも述べたように、今回参加して頂いた多くの方は実行委員による人海戦術の網に好意的に

かかってくださった方が多いため、どうしても発表内容に偏りがあったことは否定できません。にもかかわらず、すべてのセッションに出席して、丹念にOHPと予稿集を目で追っている学生（特に女性に多かったようです）が結構いたことはせめてもの救いでした。主査による閉会の挨拶の後、参加者は各人各様の思いを胸に帰途につきました。

今回でSSORも32歳を迎え、しかも発足以来ほぼ毎年のように開催されてきたことを考えると、当該夏季セミナーの歴史と重要性を感じずにはいられません。ただ、最近の傾向として、SSORが卒業論文や修士論文の発表会のような様相を呈し、毎年お決まりのパターンで進行されるといった批判があることも否めないようです。よく準備し、内容も吟味された発表を聞くことはまことに結構ですが、講習会やゼミの形式でORの基礎的勉強を行うと同時に最新のトピックスにもふれることができるよう、SSORの在り方について再考する時期にきているのかもしれません。ご承知の

ように、SSORはOR学会とは独立に運営されている任意団体ですが、わが国におけるOR研究の登竜門として長い間不動の地位を確立してきたことも事実です。そこで、40周年を迎えたOR学会の長期計画の枠組みにおいて、SSORへの支援を要請することでこの駄文を締めくくりたいと思います。広報関係だけでなく、SSOR開催に向けての経済的援助や講師の派遣などを通じて、今からまさにOR研究に携わろうとしている若い世代のために貢献する方法を学会として模索する必要があるのではないのでしょうか。むしろ、SSORの古き良き、そして自由な伝統を継承しながらというのが制約条件です。また、SSORに参加する若手研究者や学生も、与えられた環境に安住することなく、より好ましい方向へ進んでいけるよう、積極的に参画してゆく必要があると考えます。このような学生・若手研究者の交流の場であるSSORがますます盛り上がることを願ってやみません。次回は中京地区で開催されることが決まっています。

追悼文

井上洋一氏を悼む

本会フェローの井上洋一さんが去る9月5日逝去しました。私が井上さんと知り合いになったのは今から14、5年前だったと思います。毎月1日新宿副都心のレストラン・レダで開かれる新宿OR研究会に出席し出してからです。毎回にこやかに皆を迎え、名世話人ぶりを発揮しておられました。

「来月はちょっと入院しますので欠席いたします。」と昨年の秋の会合で、別れ際にわれわれに告げられました。しばらくして矢部先生と東京逡信病院にお見舞に行きますと、「食道の下のあたりをちょっと手術しました。」としごく元気でベッドの上

にすわってわれわれを迎えてくれました。「この調子なら意外に早く1、2カ月のうちにまた会合に出てこれそうですね。」と帰る道すがら2人で話合ったことを憶えています。しかしそれ以来結局一度も会合には出席しませんでした。

それからが大変でした。われわれは毎月の研究会の講師の手配に追われることになったのです。今まで講師の人選、手配は井上さんが例のスマイルと押しで手際よく処理されていたのです。

あらためて井上さんの名世話人ぶりをしのぶしいです。ご冥福をお祈り申し上げます。 小池 清